

民主化闘争情報

No. 919

2015年2月17日
発行 日本鉄道労働組合連合会
(JR連合)

JR北海道については、国会やマスコミ報道等で「歪んだ労使関係」の実態が指摘されているのは、既報のとおりであるが、『ゆがんだレール JR北海道の憂鬱』と題したテレビ放送の中で、最大労組のJR総連・JR北海道労組の姿勢について「(所属)組合員からも疑問視する声」「『殺す』、『職場にいられなくしてやる』などと威圧される」など、独善的とも言える組織運営を批判的に報じている。

これがJR総連・JR北海道労組の実態！？ 「表立って組合幹部を批判すると排除されかねない」 「殺すぞ」「居場所をなくしてやるぞ」と威圧

JR北海道の再生に向けては、第三者委員会等において企業風土の改革が必要と指摘している。現在も不祥事が続いているが、2014年9月に運転中に携帯電話を使用した運転士には懲戒解雇という今まででは考えられない厳しい処分が下りた。島田修社長は「会社が危機的状況の中、労使ともに、乗客の批判を意識し行動を律する必要がある」と語っている。しかし、放送の中で企業風土改革の課題として、JR北海道の歪な労使関係、とりわけ最大労組のJR総連・JR北海道労組の状況が次のとおり批判的に報じられている。

最大労組の姿勢を疑問視する声は組合員からも出ているが、表立って幹部を批判すれば排除されかねないという。

最大労組の組合員は「(組合を批判すれば)『殺す』、『職場にいられなくしてやる』、『職場にこられなくしてやるぞ』、『居場所をなくしてやるぞ』などと威圧され、職場に出てきたら待ち構えて無視する」と語る。

(テレビ朝日系「ゆがんだレール JR北海道の憂鬱」より抜粋)

これまでも、JR総連・JR北海道労組に対しては、マスコミ報道等で、異常とも言える組織運営に警鐘を鳴らしていたが、改めて風土改革の課題と指摘した。

・不祥事続きのJR北の病巣として指摘されているのが労働組合問題だ。ある鉄道関係者は「組合のサボタージュの側面は否めないし、最大労組である道労組(総連系)の責任を排除することはできないだろう」(週刊ダイヤモンド)

・「私は一番多数の労働組合に所属しています。正直、異常な組織だと入社時から感じています。政治問題が一番で、労働条件の改善は二の次です。反発や組合の方針と違う意見を言えば、徹底的に職場に訪ねてきたりと攻撃されます。だから、皆やりたくなくても活動に参加している人が大半です。(UHB北海道文化放送)

**良識あるJR総連・JR北海道労組の組合員の皆さん
健全な風土改革に向けてJR連合に結集しよう！**